

ふじいでら歴史紀行

227



アイセルシュラホールにできた大きな前方後円墳のジオラマについて、その形や斜面の葺石、立て並べられた多くの円筒埴輪、さまざまな形をした形象埴輪や、埋葬施設などについて述べてきました。また、それらが表現している古墳時代、千六百年前の信仰についてもお話をしてきたところです。

このジオラマは、古墳時代当時の形を現代の技術、方法で、40分の1の大きさにつくったものですが、最終回では、現代のジオラマづくりについてお話をしたいと思します。

ジオラマをつくる企画段階で、まず、古市古墳群にたくさんある前方後円墳の内、どの古墳をモデルとするかの検討を行いました。当初は、二重の濠と堤を備え、内濠の中に島状遺構の存在

が確認されている津堂城山古墳をモルとする案もありました。その後、検討を重ねる中で、大きな古墳つくりの最盛期の前方後円墳の形がきれいに残っている、仲姫命陵(仲津山)古墳をモルとすることに決まりました。ちなみに同古墳は、藤井寺市内で墳丘の長さが最も長い古墳もあります。

モルとする古墳が決まる後、墳丘の平面図と立面図を制作しました。これは、ジオラマの基本的な設計図となるので、『古市古墳群測量図集成』のレーザー測量による地形図をもとにしました。

設計図をもとにジオラマの形をつくりたあと、斜面に葺石を施す作業になりました。本物の石を葺く方法は、基底石と区画石列を並べたうえで、

焼け目は1本1本異なり、リアル感を醸し出しています。

以上、ジオラマづくりの現場から、制作の一端をご紹介しました。それでも改めて思うのは、実物の40分の1のジオラマ制作だけでも様々な工程があり、多くの時間と作業が必要となるということです。実際の大きな前方後円墳をつくるには、実に莫大な作業量が必要であったことが実感できるプロジェクトとなりました。

古市古墳群にたくさんの前方後円墳の内、どの古墳をモデルとするかの検討を行いました。当初は、二重の濠と堤を備え、内濠の中に島状遺構の存在



▲制作中の前方後円墳のレプリカ

(区画石列が割り付けられています。)

アイセルシュラホールに
大きな前方後円墳ができたよ!

⑥ ジオラマづくりの現場を訪ねて